



この日のレッスン曲はラヴェルの《ラ・ヴァルス》。粕谷教授は舞うように学生を指導していく。レッスンを受ける長瀬賢弘さんと川崎翔子さんは現在博士後期課程に在籍。粕谷教授とは藝大入学前からの長いつきあいだ

藝大の教員たちが、日々の研究やレッスンに動しむ「研究室」のなかはどうなっているのだろうか？なかなか見る機会のない部屋を潜入ルポする。

音楽学部器楽科 ピアノレッスン室 粕谷(多)美智子教授

Department of Instrumental Music, Piano Course
Professor KASUYA, Michiko



二〇一〇年十二月、冬晴れのある日の午前、上野キャンパス音楽学部一号館にある粕谷美智子教授のレッスン室を訪ねた。

粕谷教授は一九八九年から東京藝術大学音楽学部の非常勤講師となり、一九九六年からは助教授、二〇〇三年からは教授、そして二〇〇六年からは音楽学部附属音楽高等学校の校長も務めている。粕谷教授の藝大での教育活動は、大学、大学院及び附属高校でのピアノ実技指導のほか、大学院開設科目の器楽特殊研究の授業を担当している。

研究室にお邪魔した日は、大学院生に対する個人レッスンの日。粕谷教授の門下生（附属高校、学部、大学院の在校生十八人）が集う「Group美」が、年明け一月に催す発表演奏会（すみだトリフォニーホール）のため、二人の院生をこれから指導するところであった。この発表演奏会は今回で第二十二回を数えるというが、門下生たちが演奏のみならず、会場の確保やプログラムづくり、宣伝などを行っており、演奏以外のステージマネージメントの教育も同時に行うものとなっている。しかし、粕谷教授が、二〇一一年三月をもって退任されるため、「Group美」に就いての最終演奏会となる。

この日のレッスン曲は、モリス・ラヴェル作曲《ラ・ヴァルス》の二台ピアノのためのもの。この曲は管弦楽曲としてもよく知られているが、作曲者自身によるピアノ二台用やピアノ独奏用があり、二台ピアノ版は原曲の管弦楽版に先駆けて初演されているとのこと。

レッスンを受けるのはともに大学院博士後期課程に在籍している長瀬賢弘さんと川



崎翔子さん。長瀬さんは、プロコフィエフの研究とレッスンのためモスクワ音楽院にも在籍しているが、今回一時帰国したばかり。中学生のときから粕谷教授にレッスンをを受け、ソロピアニストとしてすでに活躍中。川崎翔子さんも教授に師事して十五年以上。第五回安川加壽子記念コンクール第一位など数々のコンクールで優勝、入賞し、二〇〇七年からはソロリサイタルを行っている。今回の発表演奏会では二人がトリを務める。

レッスン室には二台のピアノが平行して置かれており、粕谷教授は、ピアノを前にした二人の院生の間に立ってレッスンをつけていく。「これからなにが起るんだろ」と、わくわくとした期待を抱かせるように「音量で示すのではなく、気持ちに盛り上げて」体の中から、心の底から大きく三拍子を感じて「体全体で大きな三角形を描くの」「感じたままでは足りない、何倍も強調しないと」「フランスの音楽だから、品性を保ちつつ」「縄跳びのまわっている縄に思い切って飛び込むような感じで」……。

タイトルの《ラ・ヴァルス》はフランス語でワルツのこと。粕谷教授の指導そのものが華やかな舞踏を見ているようだ。

粕谷教授はピアノのレッスンを「技術に裏つけされたデッサンのうえに、さらに色をつけていく方法論を提案していく」ものだという。二人の大学院生は教授のことを「とても厳しいけれど、親身になって指導してくれる優しい先生」と口をそろえる。音楽に血を通わせるようなレッスンという印象を受けた。